

## 世界経済危機の中で、日本は、否、世界はどう変わるか

## 電力市場開放「分散型」の時代に遅れるな

11.10.30 朝日新聞 波間風問 編集委員 安井孝之

ディスプレイの数字や図形が刻一刻と動く。各家庭の太陽電池パネルでの発電量や電力消費量、蓄電池への充電量、エコカーの運転状況……目で各家庭ごとの電力使用状況などが分かる。

青森県六ヶ所村で日本風力発電、トヨタ、パナソニック、日立の4社が参加した実証実験が進む。6世帯で太陽光や風力発電などの再生可能エネルギーで暮らせるかを試している。冬場の自給率は2割程度に落ちるが、夏場は消費量の3倍以上を発電、年間では100%の自給率を達成した。今はコストは度外視しているが、今後、自律的なエネルギーシステムの実現を探っていく。10年後の実現化と思っていたが、大震災で時間軸は縮まった。

再生可能エネルギーは天候に左右され、あてにならないというのが従来の「定説」。日産自動車でもリチウムイオン電池の開発に従事した東大堀江准教授は「据え置き方の大型電池をリチウムイオン電池で作るのは自動車より安く済む」と話す。この分野の開発に集中すれば、不安定さを補えると言う。

日本総合研究所が音頭を取り、再生可能エネルギーを使ったエコタウン推進研究会が24日発足した。関連企業40社が集まった。太陽電池パネルはすでに新築住宅の7、8割に設置されている。小さな分散型の発電所が需要側に増えているのだ。その発電所を町全体でマネジメントする手法を編み出し、新しい電力需給の仕組みを作る試みだ。電力市場の自由化論議は監督官庁が主導する形で10年前にも盛んになり、電力業界の巻き返して静まった。だが今、需要の現場で起きつつある変化は監督官庁とも電力業界とも関係の薄い会社や人たちが起こしている。日本総研創発戦略センターの井熊所長は、「分散型の時代が来る。ブロードバンドというネット技術も家庭に入った。10年前とは全く違う」と指摘する。

技術の発展に裏付けされた需要側の変化に合わせた電力市場改革を急がねばならない。大型コンピュータ主導からパソコン主導に変わったような大きなうねりが電力市場でも起きている。

## 書籍紹介① ニセ科学ってなんだ? 思い込みが行動を左右する

11.11.06 朝日新聞 ニュースの本棚

科学医療部 久保田 裕

【ニセ科学ってなんだ?】 一見、科学的な主張に見えるものの、実は科学でない。そんな主張をニセ科学とかエセ化学、疑似科学などと呼ぶ。血液型でその人の性格が分かるとする血液型性格判断や、マイナスイオンを浴びると健康になるとか、水に「ありがとう」と話しかけるときれいな結晶ができるとか。などといった類の主張のことだ。先月亡くなったスティーブ・ジョブズ氏が癌の治療に取り入れ、のちに悔んだと伝えられる食事療法などの代替医療にもニセ科学が多い。人間の行動や発言は、理性や客観性、科学的事実といったことより先に、自分が元から抱いている感情や思い込みといったものに左右されやすい。最近、この傾向が大きく出たのが、東京電力の福島第1原発の事故で放出された放射性物質に対する人々の態度だろう。「ニッポン、頑張ろう」という掛け声のその陰で、「放射能を散らすので、福島製の花火は打ち上げるな」とか、「福島から来るトラックは走らせるな」とか、「地元の送り火で岩手県産の松は焼くな」といった過剰反応が色々出た。

【不安が招く差別】 目に見えない放射能が不安なことは分かる。しかし自分が不安だからといって、それで他人を差別したり、排除したりしてよい訳ではない。ましてや被災した人々を更に苦しめるような真似をしていい訳はない。今回の放射線騒動では、放射線を「正しく怖がろう」とも言われた。「正しく怖がる」のは実はかなり難しい。せめて他人に迷惑をかけるような「間違った怖がり方」だけは、差し控えたいものだ。

書籍紹介② 『もうダメされないの「科学」講義』(光文社新書 ¥798)は、震災関連で生まれた色々なニセ科学へ警鐘を鳴らす。例えば発酵させた米のどぎ汁が放射性物質の「毒出し」をするとして、目に差した人の例が紹介されている。「目が真っ赤になって目ヤニがたくさん出た」というのだが、それはどぎ汁が効いたのではなく、単に目に雑菌が入っただけでは? すぐに病院に行った方がいいだろう。1分子も残らないほど希釈した水でも、薬としてよく聞くと主張するホメオパシーも「薬効がない」とバツサリ。今回の原発事故で、ホメオ

## 【写真】

千葉県の成田山新勝寺では、抗議はあったが、岩手県陸前高田の被災松が焚きあげられた

パシーのレメディー(砂糖玉)をとったら「被曝も大丈夫！」だと宣伝しているのだという。

**書籍紹介③ 『人間この信じ易きもの 迷信・誤信針はどうして生まれるのか』(新曜社 ¥3045) 【予言やUFO】**も、人々が自分の思い込みに、如何に騙されやすいかは、この本を読むと納得できる。賭け事やスポーツで「波に乗った」と思うことがある。なぜか続けて物事がうまくいく場合だ。でも、本当にそんな現象があるのか、バスケットボールのショットのデータを基に、著者が統計的なチェックを試みている。結果は、直前のショットの成功が次の成功を呼ぶことなどなく、ボールはランダムに入ったり、入らなかつたりしているだけだった。この研究結果を米国のバスケットの有名監督に伝えたら、返ってきたのは「誰だい、この男？こんなことは関係ないよ」の一言。裏付けがある客観的なデータより、長年の自分の思い込みの方が信じられるというわけだ。より多くのニセ科学を知るには『**ハインズ博士 再び「超科学」をきる 代替医療はイカサマか**』(化学同人 ¥3150)がお勧め。心霊術、予言、UFO、代替医療といった古典的にニセ科学のオンパレードを、バツバツと切ってくれる。

### 著者の記述 (38)

12月の半ば、東京の銀杏がやっと黄色に色づき始めた頃、家内を連れて久しぶりに娘達を見舞った。新幹線で長いトンネルを抜け湯沢駅に入ると、周りの山々は雪で真っ白だった。今では、娘達を見舞うと言うよりも、僕達の心を静めて安心するために行くのだ、と言った方が良かった。新しい病院に行くには、新潟駅西口の今までと同じ停留所からバスに乗る。今までと同じルートで、元の市民病院の脇を過ぎ、鳥屋野湯に注ぐ川を渡り、西に曲がって鳥屋野湯の南の平地に行く。東北電力のスワンスタジアム・サッカー場の脇を抜け、産業振興センターを過ぎるとすぐそこだ。以前、娘夫婦は、このサッカー場に会社のバレークラブの仲間達とアルビレックス新潟を何度も応援に来たと言っていたな、と思出す。周りに何も無い所に高層ビルが1つ屹立している。それが新しい市民病院だ。玄関がバス停で、1階のロビーに入ると、そこは病院というよりも、アーケードといった感じで、天井が吹き抜けのように高く、右側に色々な店が並び、奥の左の方に病院の受付や会計がある。ちょっとした街の様相だ。エレベータを降りると小児病棟は、こっちな、と直ぐ分かる。しかし、病棟の入り口は頑丈な鉄の扉で、扉の取っ手を引いてもびくともしない。どうしたものかと戸惑っていると、職員らしい人が来て、脇の壁の丸い大きな押しボタンを手の甲でコツンと押し電動扉を開けた。すぐ後に続く。扉の奥の壁には手洗い器があり、例によってアルコール・ゼリーの手の消毒器も置いてある。ちょっと廊下を抜けると、広いナースステーションがある。机の配置は、こちらから看護師さんたちの顔を見渡せるようになっている。逆に見れば、全職員からこちらが見られることになる。顔馴染みの婦長さんがパソコンから顔を上げてにこっとしてくれる。その広い空間の奥半分に、半円形に病室の入り口が配置されている。ナースステーションからどの病室にも最短距離で行けるようになっているのだ。病室は6人部屋で、三つのベッドが左右に分かれ、パーテーションとカーテンでうまく仕切られている。一つ一つが個室のようだ。孫達は窓際のベッドで互いに足を向き合わず形で寝ている。窓の外は広い屋上で、あちこちに樹木が配置され、ガーデンといった感じだ。孫達は経管食の食事中で、うとうとしていたようだが満願の笑顔で歓迎してくれる。娘の顔色も表情もいい。娘の話では、このベッドは孫達の専用で、いつでも受け入れて呉れるのだと言う。やがて孫たちが昼寝に入った。この隙にお茶でも飲もうと、3人で一階の「商店街」へ行く。いいこと尽くめだね、というような話をすると、娘は少し浮かぬ顔をして、しゃべりだした。彼女が言うには、病院というところは治療するところで、子育ての場ではないと言う。なるほど、そりゃそうだ。そのためどこかの療養施設に移りたいと言う。療養施設は成長段階に応じた教育を受けるといっていいのではないにしても、色々なイベントが企画され、付き添い看護人の生活にも配慮し、長期滞在ができるようになっているのだと言うのだ。県内では柏崎と長岡に適当な療養施設があり見学に行ったが、どの施設も脳障害児が対象で、人工呼吸器で生きているややこしい障害児の受け入れには難色を示していると言う。市民病院側の提案は、月の半分を家庭で、残りの半分を施設、何かあった時には、いつでも病院、というもので、施設側への説得に努めてくれていると言う。娘の前を向いて将来を見据えた考えに安堵する。

(この項次回に続く)

